

## 第2章 環境への負荷の自己チェックの手引き

環境への取組を行うには、まず、自らの事業活動に伴って環境への負荷がどれだけ発生しているのかに気付くことが重要です。環境への負荷の自己チェックでは、主な環境への負荷について、環境パフォーマンス指標ガイドラインのコア指標を基に、事務所・工場等からの発生量を簡易な手法で計算する方法を示しています。

把握・評価する環境負荷項目を選択する際には、自らの事業活動全体を見渡して、「どの事業活動が環境に大きな影響を与えていると思われるか」を検討し、その事業活動がカバーされるように項目を選択することが重要です。

特に、二酸化炭素排出量、廃棄物排出量及び総排水量（水使用量）は必ず把握して下さい。

また、「今後、どのような分野に重点を置いて、何を目指して取組を進めていくか」といった方針を事業者自身が考え、その方針に従って項目を選ぶことも有効です。

さらに、周辺の住民や消費者、地方公共団体等の関係者の意見を聞いてみることも役立つでしょう。

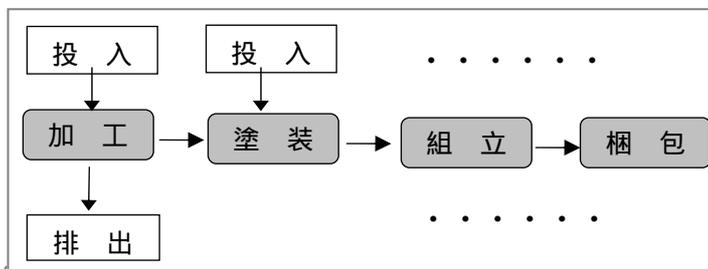
なお、地方公共団体に問い合わせる等して、周辺地域での汚染等環境問題の状況を調べ、周辺の環境問題と自らの活動の関係を考えてみることも、評価項目を選ぶ上で参考となります。

環境負荷を把握するには、事業活動の一連の流れを整理し、各段階から生じる環境負荷を洗い出してみることが有用な手段となります。各段階に何を投入し、何が大气や水等に排出されているか整理してみましょう。

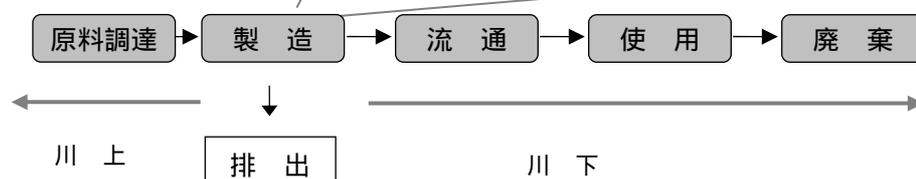
この際には、守るべき法規制や業界団体等の動向にも配慮し、対応すべき環境負荷に漏れがないようにすることも必要です。

また、自らの事業活動の“川上”、“川下”も考慮したライフサイクルの視点から活動や製品による環境負荷を把握することで、自らの事業活動の中で何に取組むべきかが見えてくることもあります。

事業活動の流れ（例）



製品のライフサイクル（例）



## 環境への負荷のチェックに当たっての留意事項

### チェックシートの使い方

- ・ 別表1に示しているチェックシートは、環境への負荷の自己チェックが容易になるように、例として示したものです。個々の事業者の状況に応じて、項目、排出係数、単位等について修正して利用して下さい。重要なことは、年々の負荷量を同じベースで容易に比較できるようにしておくことです。
- ・ チェックシートは、単年度の排出量を算定する形になってはいますが、可能な項目については、2～3年のデータを整理し、対前年度比や排出量の推移を把握し、どのように改善されているか等の評価を行って、計画の作成や取組に活かすことが重要です。
- ・ チェックシートには、「活動規模あたり」の負荷量を記入する欄が設けられています。これは、事業活動の規模が変化する場合にも、環境への取組の効果を把握できるようにするためです。生産量あたり、出荷額あたり等、様々な指標が考えられますので、事業の特性に応じて、適切なものを選んで下さい（全てを計算する必要はありません）。

### データの集め方

- ・ 必要な情報、データの収集整理に当たっては、経理関係のデータや行政の指定統計等、事業所内に既にある情報を有効に活用します。
- ・ 資料は、それぞれの担当部署にバラバラに保管されていたり、伝票ベースでしか保管されていない等、初めは、収集・整理に時間がかかるかもしれませんが、社内にある環境関連情報を一度、環境の面から整理して、担当者が管理・把握できる仕組みを整備することが望まれます。
- ・ データは月単位程度の短い周期で把握できれば、目標の設定の際により有効です。
- ・ 少なくとも過去3年程度の実績をチェックできるデータがあるとよいのですが、仮にそのようなデータがない場合は、以後、適切なデータ管理を行うようにしましょう。

### 活用できる社内の情報例

- ・ エネルギー、資源、原料の使用量、購入量、金額等の伝票
- ・ 石油等消費構造統計調査表の写し
- ・ マニフェスト伝票
- ・ 廃棄物処理委託会社への支払い伝票
- ・ レンタルコピー機の請求書、支払い伝票
- ・ 設備使用書、説明書
- ・ 大気汚染物質排出量総合調査票の写し
- ・ 水質汚濁物質排出量総合調査票の写し
- ・ 計量証明書
- ・ 化学物質保管管理表